



白井先生は大切な思い出を語ってくれました。幼い心に沁み入った言葉は、いくつになっても忘れません。

文章の教訓

国語科 白井敏之

読書体験を語るとき、二人の亡き祖母のことを思い浮かべずには語れない。

父方の祖母は幼い頃の私に「浦島太郎」や「桃太郎」など色々な昔ばなしを語り聞かせてくれた。優しい声でその話に関わる童謡を口ずさみながら、心を込めて私たち兄妹に語ってくれた。私は祖母の語る昔ばなしが大好きだった。祖母の歌声や語り口調は今でも鮮明に覚えている。学歴もなく読み書きも満足に出来なかった祖母であったが、昔ばなしだけではなく「ことわざ」なども祖母から教わった。

看護師だった母方の祖母は詩や俳句を作るのが好きだった。今でも実家の床の間に飾られている「文字」という祖母の詩がある。

点と線との交わりなのに何と可愛らしい姿でせう
踊っているのあり跳ねているのあり笑っているのから泣きべそかき
みんな点と線との集まりなのに嬉しい胸中を伝えてくれる悲しい心を表してくれる
目に見えない心の中まで文字は形で残してくれる 何時までも
だから文字は可愛らしい 私は文字が大好きそして怖い

祖母の遺品から出てきたこの詩は、私に何らかの影響を与えているかもしれない。

4、5才の頃、母が地域の公民館の一室でミシン縫製のパートをしていた時期があった。その隣室の簡素な図書室で絵本や図鑑を夢中になってながめていた事を記憶している。私が本というものに親しんだ最初の経験である。小学校の卒業式、校長先生の式辞で小学4年時の「創立100周年記念文集」に書いた「母の日」という私の作文が匿名で紹介された。母がとても喜んでいてことを覚えている。



中学、高校時代、クラブ活動一色となった生活が読書を全く無縁のものにした。ただ、高校時代に唯一印象に残る一冊の本がある。有島武郎の童話集『一房の葡萄』である。「小学校教師を目指す人は是非この本を読みなさい」という国語担当の先生の一言がきっかけで、私はその本

を小学校教員志望の女友達に贈ったことだ。

大切な記憶とついでに

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』白井敏之

大学生になって、村上春樹を読んだ。初対面は『羊をめぐる冒険』だった。

その後、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』に出会い、その面白さに魅了された。対照的な二つの世界が交互に描かれながら物語は進んでいく。「世界の終わり」の章は、「壁」に囲まれた一角獣が生息する街が舞台になっている。影を切り離された主人公「僕」は、図書館で一角獣の頭骨から古い夢を読み解く「夢読み」として働いており、心と記憶を失くした街の人々との交流が静かに語られる。打って変わり「ハードボイルド・ワンダーランド」の章は、スリル満点リズム感のあるストーリーで、個性豊かなキャラクターが登場する近未来の話となっている。意識の中ともいえる夢の世界と、慌ただしく展開する現実の世界。交わるはずのない二つの世界が、最終的には一つになる。この長編小説は、なぜか私に中国の思想家荘子の「胡蝶之夢」を連想させる。

もう一つの村上の代表作といえば『1Q84』だ。二人の主人公、スポーツクラブの女性インストラクター「青豆」と予備校の数学講師である「天吾」を中心として、それぞれの話が進んでいく。この長い物語には様々なテーマが存在する。「家庭内暴力(DV)」



「宗教問題」「カルト集団(閉鎖的コミュニティ)」など現代でも取り上げられる大きな社会問題が、村上独特の不思議な世界の中で描かれている。また、西洋文学やクラシック音楽、古典文学「平家物語」に「NHKの集金人」といった、私たちに身近な題材が至るところに散りばめられている。現実世界とは異なる、二つの月が存在する「1Q84年」に迷い込んだ天吾と青豆。二人は運命の再会を果たし、その世界からの脱却を試みる。

その他の短編集『回転木馬のデッドヒート』や『中国行きのスローボート』なども魅力的な村上作品の一つである。

残念ながら、今年も村上春樹のノーベル文学賞はならなかった。しかし、村上の文章には「常人の考えつかない独特のメタファー(隠喩)」と「簡潔な文章で深い意味を表現する」という真骨頂がある。この通俗性が世界中の人々に支持される所以だと私は思う。

村上はある短編の中で「あらゆる文章には教訓というものが存在する」と言っている。

さて、私のこの文章の教訓とは何だろうか。

「目に見えない心の中まで文字は形で残してくれる 何時までも」
祖母が私に残したこの言葉が、この文章の教訓になるのかもしれない。